関西大学『独逸文学』第47号 2003年3月

アルニム家の城館

二 宮 ま や

はじめに

ドイツ文学者の中で名前にvonのついている人は少なくない。これはもちろん貴族の家柄を表すが、その中でもプロイセンのJunkerは地方の地主貴族である。Joseph von Eichendorff（1788－1857）の父はその城Lubowitzと領地を負債のために、詩人のまだ幼い頃に破綻させた。両親の死後1823年ルボーヴィッツは強制競売にかけられた。そしてアイヘンドルフには失われた故郷への憧憬と生活苦が一生残された。彼は官職について一家を養う。そういった人々の中で、Achim von Arnim（1781－1831）は親ゆずりの領地・城に死ぬまで住んでいたことで「恵まれた」部類に入るかもしれない。しかし領地経営は優雅な生活ではない。

アルニムは不自由のない領地貴族の子弟として育ったあと、若い頃は何とかして中央で職を得たいと努力したが、思うようにはいかなかった。もちろん文筆活動も捨てられないがそれは生活の糧にはならない。彼が思い定めて1814年4月33歳の時、妻Bettina（1785－1859）と幼い子供二人を伴い、ベルリーンからその90km南にある領地Ländchen BärwaldeのSchloß Wiepersdorfに移り住んだのは、主として経済的理由からであった。逃げ場があったという限りではやはり恵まれていたのかも知れない。しかしその領地から収益をあげるための努力は並大抵のものではなかった。すでに負債を抱えていたし、新しい農業経営の波が押し寄せてくる時代に、素人であるアルニムの力をもってしては、返済利子分を稼ぎ出すことが出来るかどうかのところである。Wilhelm Grimmは兄Jacobに次のように書いている。

> アルニムは畑での耕作を楽しんではいるけど、本来の農業はそれを引き受けることになれば、やっぱり彼には重くのしかかるだろう。

> 彼と彼の兄の物である三つの農地からなるLändchen全体は賃貸料8000ターラーをもたらしてくれる。しかし私が思うのにそれは150,000ターラーの借金の利子の額である。それゆえ残るのはほんの僅かしかない。[...] 聖霊降臨際の最初の日に我々はアルニムのもう一つの領地ベーアヴァルデに行った。そこの方が肥沃で、美しい樫の木が生えていた。しかし住居はほとんど使えない状態だ。

これが現実である。しかもアルニムは詩人をやめたわけではない。1816年12月の終わり頃、ベッティーナは田舎暮らしに耐えられず、子供の教育のためもあってベルリンへもどってしまう。アルニムには家族への仕送りの負担が加わった。先のヴィルヘルム・グリムの手紙は1816年ヴィーパースドルフに訪問滞在した時のものであるが、同じ6月13日の次の報告はこのことを予感していたようである。

> 子供たちはほとんど農民の子供のように育て上げられていて、上っ張りを着て走り回っている。その布地はベッティーナが自分で織った物だ。アルニムの家は広大で、それについている庭と後ろの白樺の森は美しい。しかし建物の内部はかなり荒れている。でも元は華美で本来は豪華な家具調度が整っていたのだ。部屋部屋の壁は深紅の絹張り、ふんだんに金の押し縁、鏡板張りの床。彼の書斎にはあらゆるものがかなりごたごたと置いてある。ベッティーナが自分で家事をしている。すべてのむずかしいこと、たとえば上手な料理は容易に身につけた。しかし彼女はこの暮らし方にやる気をもっていない。だから彼女にはなにもかもが辛く、それでやっぱり滅茶苦茶になっている。その上彼女は四方八方から騙され、盗まれる。二人にとってはこの生活の仕方から抜け出すことが出来たら、それが望ましいのだろうが。

その後アルニムは憑かれたように領地の世話にのめりこみ、ベーアヴァルデの館とその周囲の荘園をも小作から取り返して、自分で経営するようになった。植林、畜産、ビールや焼酎の醸造、排水溝敷設も手がける。一方彼は寸暇を惜しんで執筆を続け、„Die Kronenwächter“ 第1巻

を完成させたのはこの頃である。そして文学と農場仕事を両立させたこの苦闘の17年間ののち、50歳の誕生日の5日前に突然彼はこの世を去った。子供は7人になっていた。

ヴィーパースドルフという館の名前はアルニムの名前につきまとっている。アイヘンドルフのルボーヴィッツ城のように完全に人手に渡ってその後破壊されてしまったというのではなく、実は250年以上経った今でも存在している。この城の運命は折に触れて報告されているが、アルニム以前とアルニム以後を簡単にしるすと次のようになる。

ヴィーパースドルフ城

アルニムの母方の祖母 Caroline von Labes（1730－1810）は経営手腕の持ち主で、1776年未亡人になってからいっそう領地の監督に打ち込んでいた。翌年にはマルク・ブランデンブルクの古くからの、歴史上も有名な家柄の貴族 Joachim Erdmann von Arnim に16歳の娘を嫁がせた。彼が1780年に元の騎士領ベーアヴァルデを手に入れようとした時、彼は多額の負債を抱えていたので、その資金を娘の持参金としてラーベス夫人が出してやった。この領地の中にベーアヴァルデ城と1730年代に建てられたヴィーパースドルフ城の二つがある。しかしその娘は第2子アヒムの出産がもとで3週間後に他界した。以後祖母が二人の孫を引き取って養育した。のちに1804年娘婿が死んだとき、このベーアヴァルデは正式にラーベス夫人に戻ってきた。

祖母はすべての領地の管理を、たくさんの使用人を指揮して死ぬまで一手に引き受けていたので、アヒムは若い頃それには何の関心も抱いていなかった。祖母の方も孫達が自立できる職をもつように仕向けていた。彼女が死んで遺言状を開いてみると、この領地には長子信託遺贈（Fideikommiß）が設定されていて、アヒム兄弟ではなく彼らの長男が相続するように定めれていた。これは土地の細分化を避けるために当時よくとられていた措置である。アヒムはベッティーナに求婚して、合法的に子供を得るという自分の義務を果たすことを決心した、とはっきり言っている。そして祖母の死後かっきり一年経った1811年3月11日二人は結婚した。ベーアヴァルデはアヒム・フォン・アルニムにとって、次の代のために守り続けなければならない課題であった。彼にはこれを処分

する法的権利はない。

さて1812年めでたく長男Freimundが生まれて、やっとベーアヴァルデの地およびヴィーパースドルフ城はアルニム家のものとなった。しかしそのさい管財官がつけられていて、アヒムに許されていたのは無償での館の居住権と領地の用益権であった。アヒムの死後フライムントが成人になった時に晴れて相続したものと思われる。次の相続者である彼の一人息子は画家で、継母の多額の遺産を使って両翼に平屋部分を増築し、自分のアトリエや立派な温室も建てた。今の華麗な館の外観は彼に負うものであり、随所に配置された彫像類は彼がイタリアから持って来たものである。もともと森や池もある広々とした園に囲まれていて、付属教会や一族の墓地もその敷地の中にある。彼はこの領地管理をずっと母方の従兄にまかせ切りで、自分はもっぱら生活を楽しんだ。この二代目には子供がなく、アヒムの長男の子孫はここで終わり、次は従弟つまりアヒムの三男の長男Erwinが受け継ぎ、次にその長男つまりアヒムの曾孫Friedmund（1897－1946）が相続した。そして第二次世界大戦、ドイツ敗戦、旧東独時代更に東西ドイツ統一を迎える。

1945年4月ロシアの地雷探知部隊がヴィーパースドルフ城を占領し、住人を追い払う。当時そこに住んでいたのは、あとで触れることになるが、最後の領主フリートムントの家族ではなく、彼の70歳の母親とその娘達であった。一番年上の娘Bettina Enckeは女流画家で、フリートムントの戦友である平民出のWalther Enckeと結婚していた。地雷探知部隊は館の略奪を欲しいままにした。埋められてあった詩人夫妻の手稿や金目のものを見つけ出すのはお手の物であったろう。文学的に貴重な手紙類も焚き火に利用された。10月5日土地改革で領地の所有権は没収された。エンケ夫人は精力的に役所をめぐり歩き、説き伏せ、ようやくヴィーパースドルフ城を破壊から守った。あるユダヤ人にして共産主義者の知人が、戦争中エンケ夫妻およびフリートムントから受けた恩義を証言したおかげで、彼女が反ファシスト者と認知されたことが幸いした。ベルリンの「ドイツ作家同盟」が耳を貸してくれ「ドイツ詩人財団」が設立された。これに属する作家達にとってこのすばらしい田園のなかの美しい城と庭園は、精神の仕事をする人間のための避難所としてどこよりもふさわしく思えた。なんと言ってもベッティーナ・フォン・アルニ

ムは、解放をめざす政治運動参加の理想像とみなされていたからである。かつて自分はこの地に住まず、夫アルニムがだんだん農民風になると嫌がっていたベッティーナが、城の存続に貢献することになったのは面白い。

1976年にヴィーパースドルフは保護記念地に指定され、旧東独政府は1975〜81年の間に650万マルクを注いでこれを修理改装した。元の厩舎と付属建物は宿舎と会議室に建て替えられ、庭も手入れされた。そうして「作家と芸術家のための活動と休養の場＝ベッティーナ・フォン・アルニム・ホーム＝ヴィーパースドルフ」が誕生した。救うことのできた蔵書などの大部分はワイマールドイツ古典文学研究所の在庫品に組み入れられた。このホームの最も重要な常連客の一人がAnna Seghersであり、Arnold Zweig、Sarah Kirsch、Günther Eichらもここに滞在し作品を残した。もっとも作家同盟から追放された作家達にとっては、ここは一つの抑圧の象徴であったともいう。

一方ベーアヴァルデの城は元は12世紀に建てられた、ゴシック様式の騎士の城郭である。ベッティーナは未亡人になってからは、夫の兄がヴィーパースドルフを賃貸に出してしまったので、夏から秋に毎年ここに滞在し執筆もした。しかしその間1845年の夏火災にあい、半分を焼失した。そのあと検査官などの住まいと穀物倉庫として使われていたが、1945年ソ連軍の侵攻の際、旧体制へのみせしめとして破壊され、無惨な廃墟となった。当時ユンカーの館はたいていこのような目にあったのである。ところが何年も経ってからこのベーアヴァルデの無骨な見張り塔の残骸が、DDR当局によって保護記念物に指定され、いまも残っているのは歴史の皮肉である。

東西ドイツ統一後、城の最後の所有者フリートムントの未亡人Clara（1909〜）は、没収財産の返還請求をおこした。フリートムントは1946年1月13日ロシアで捕虜になったまま病死（栄養失調）したのであった。しかし旧東独政府がかけた多額の修理費のため、この訴えは斥けられた。その頃旧東独の資産を管理するための信託公社が作られていたが、それによってヴィーパースドルフ城はホテルに、庭園はゴルフ場に変えられる計画が迫っていた。統一後旧東ドイツに最も不足していると考えられた施設がホテルであった。そこでクララはフランクフルトa.M.の

Freies Deutsches Hochstiftと協力して1991年「社団法人ヴィーパースドルフ城＝アヒムおよびベッティーナ・アルニム記念地＝友の会」を設立し、その運動で城の3室をアヒムとベッティーナの記念博物館に当ててもらうことが出来た。現在城はベルリンとブランデンブルク州による「文化基金財団」運営の「芸術家の家・ヴィーパースドルフ城」となり、画家、音楽家、作家のための奨学生のホームとして、芸術活動支援に利用されている。

アヒムおよびベッティーナ・アルニムに関する学術的な集会の歴史はさほど古くはない。アヒム・コロキウムの第1回は1982年アウクスブルクで。ベッティーナ・シンポジウムが88年にバート・ホンブルクで、翌年にはミュンヘンで。このとき次はヴィーパースドルフでと予定されたが、旧東独の崩壊でこの計画は流れた。しかし関係者の努力は続けられていて、「芸術家の家」の改装発足の年1992年にやっとヴィーパースドルフ・アルニム・コロキウムを開催することができた。これはアヒムとベッティーナに関して、広汎な観点から学術的な新しい知識を得ようとする初めてのコロキウムである。

このコロキウムの成果は上記友の会の援助のもとに94年に出版された。それによると主眼は、元東西ドイツのアルニム研究者が集まって、この土地の守護神が詩人夫妻の作品にどのような影響を与えているか、ヴィーパースドルフの困難な生活条件がいかに作品に反映されているかを明らかにするという、開催地の地の利を生かしたものであった。もちろんアヒムのヴィーパースドルフ移住が単なる牧歌的な田舎への隠遁ではなく、領地や家族への責任感と、それの遂行への挑戦であったという理解が根底にある。アルニムの足跡において世界各地との地理的結びつきは広くしかも多様である。彼の『民謡について』(„Von Volksliedern“, 1806) の中で基本方針として語られている「さまざまな時代から、さまざまな地方から」の観察が夫妻の作品の特徴であって、それはプロイセンの諸事情が、直接的であれ間接的であれ、国家を超えた背景で表現されているところにあらわれている。従ってこのコロキウムのテーマは地方的な狭い対象に限定されるのではなく、地理的に広くあちこちの土地との彼らの関わりを、その残されたものの中に探ることに定められた。論集の表題は „Die Erfahrung anderer Länder“ である。

その後アルニムの著作や手紙の本格的なHistorisch-kritische Ausgabe (Weimarer Arnim-Ausgabe) 刊行の作業が続けられる中で、その編集者達を中心として1995年国際アルニム協会が設立された。この協会の活動として毎年コロキウム又は研究発表会を催すことになり、その第1回コロキウムは1997年またもやヴィーパースドルフ城で開催された（論文集2000年）。第2回は1998年Zernikowで（論文集2001年）、第3回は2000年ベルリンで（論文集2001年）。第4回は2002年スコットランドのグラスゴーで行われたところである。このようにこれまで未発表のさまざまな資料の発掘により、近年活発になったアルニム再評価の動きと、この協会の活動は連動している。協会のコロキウムは意図的にアルニムゆかりの地で次々と開かれているが、その皮切りがヴィーパースドルフであったことから判るように、城あっての土地の牽引力を感ぜずにはいられない。

ツェルニコフ城

さてこれまでヴィーパースドルフ城を中心に調べてきたが、アルニムゆかりの領地・館は他にもある。第2回目のコロキウムの催されたツェルニコフを忘れるわけにはいかない。それはベルリンの北方、ブランデンブルク州とメクレンブルク－フォアポンメルン州の境に近い小村で、森、湖、古い並木道が点在する平らに開けた土地である。この起源も祖母にさかのぼる。

祖母カロリーネは裕福な市民の出であって、23歳の時同じく市民階級の45歳のM. G. Fredersdorffと結婚した。彼は、かつてフリードリッヒ2世の侍従として気に入られて、1740年に農地ツェルニコフとその館を贈られていた。この領地はフリードリッヒ2世が1737年まだ皇太子の時みずから購入した、中世からの騎士領である。貴族に叙すことなしに領地を与えたのは異例のことである。フレーダースドルフはその後近隣の村村を買い足してこの農地を広げ、レンガ工場を造り、そこで焼いたレンガを使ってバロック様式の地主屋敷を建てた。これが今に残るツェルニコフの城である。しかし彼は病気勝ちで結婚生活5年後に亡くなり、ツェルニコフをカロリーネに残した。カロリーネは夫の死後すぐの再婚と短い結婚生活を経て、1760年にHans Labesに嫁ぎ娘と息子を得た。

彼も市民の出で国王の侍従であった。1763年オーストリアのフランツ一世皇帝から男爵位を授かったが、プロイセン王はその認知を拒んだということである。ハンスの死後10年以上経って、1786年ようやくカロリーネとその息子［アルニムの母の弟］はプロイセン王から貴族の証書を受け取る事が出来た。カロリーネには領地も爵位も夫の側から転がり込んできたようにも見えるが、彼女は領地の女主人としてまた男爵夫人として、見識のある毅然とした態度の人であったようである。その分実際的で倹約家、芸術に対する理解はなく、預かった孫達の教育は厳しかった。

幼いアヒムと2歳年上の兄は祖母とともに、冬はベルリンで夏はツェルニコフの館で過ごした。ここには祖父の収集した膨大な蔵書があり、それが詩人の初期の精神発達に果たした貢献は見過ごせない。この生活は1793年彼らがギュムナジウムに入るまで続いた。その後アヒムはHalleとGöttingenの大学で物理・化学・数学を修め、1801年7月の末ここへもどって来た。11月には兄と二人でヨーロッパ教養旅行に出発したが、文学の道を志し処女作 „Hollins Liebeleben“ を出したのが、この秋ツェルニコフでのことであった。

アルニムの父は妻の死後、二人の息子の養育権を亡妻の母に売り渡してその後の関与はまったくないが、それでも再婚はしなかったので、死後何がしかの物をかれらに残した。彼は古くからの貴族の家系でその父から幾つかの農地や森を受け継いだが、そのうちのNeudorf農場の隣にあるSchloß Friedenfeldeとそれに属する土地を彼は自分で購入した。これはのちにアヒム兄弟の物になるのだが、負債も多く彼らがひそかに期待していたほどの遺産は無かったようである。アルニムはベルリンでも生涯のうちに何度か居を構えているが、いま残っている建物は祖母の家も含めて何も無い。

ツェルニコフという領地や館の名前は、その後のアルニムの文学活動に関連して呼び出されることはほとんどない。祖母亡き後これはどうなってしまったのだろう。ツェルニコフの領地はもともとはフレーダースドルフに由来し、祖母を介してラーベス家のものとなったので、アルニム家のものではない。祖母には息子ハンスがおり彼がツェルニコフの相続者である。この詩人の叔父は結婚して妻の家を継ぎ、その後常にGraf Schlitzと呼ばれ、メクレンブルクのBurg Schlitzに住んだ。ラーベスを

名乗る者はもういない。また彼は母の遺言に異議を唱え、遺産分割のことで1814年甥であるアルニム兄弟を訴え、法律上のごたごたが続いた。いずれにしろツェルニコフはその後シュリッツ伯の子孫の所有ではあったが、何十年もの間賃借人が次々と交代した。そして相続者の中には領地内の教会に対する後援者の義務を拒否し、訴訟を起こされて敗訴した者さえいたという記録が教会に残っている。このようにして50年ほどのあいだツェルニコフは、心をこめて世話をする主をもたず荒れるにまかされていた。1855年にシュリッツ伯の孫娘が死んだ時、その子孫は絶えた。ツェルニコフはラーベス家にもどり、そこの娘であったアルニムの母からアルニム家の所領となったのである。

近年上述のクララが息子のPeter-Antonの協力のもとに書いた回想録Clara von Arnim „Der grüne Baum des Lebens. Erinnerungen einer märkischen Gutsfrau“（1992）および画家として活躍している娘との共著Clara von Arnim · Bettina von Arnim „Das bunte Band des Lebens. Die märkische Heimat und der Neubeginn im Kupferhaus“（1998）の中にツェルニコフがまざまざとよみがえっている。また先に述べた國際アルニム協会のツェルニコフで開催された1998年のコロキウムでは、ペーター-アントンが夜の講演で「ツェルニコフにおけるアルニム家」について語った。それらを通してこの領地のその後の消息を知ることが出来る。ついでながらクララは高齢ながらこのコロキウムに、後援者として積極的に参加した。彼女はアヒムとベッティーナ夫妻の手稿や蔵書を研究し公開することに、惜しみない協力を申し出で、最後の領主夫人としての所有権を主張することはなかった。

ヴィーパースドルフとベーアヴァルデがアヒムの三男の長男エルヴィンの物になったことはすでに述べたが、その同じ年1891年に、ツェルニコフもまた賃貸しから取り戻され、エルヴィンはそこに移り住んで自ら領地経営を引き受けた。結局エルヴィンがアルニム家の直系として主要な領地をすべて受け継いだことになる。そしてこの時点からアルニム家と関わりのあるツェルニコフの次の段階が始まる。

ちなみにアヒムの次男Siegmundは結婚せず、四男Kühnemundは18歳で事故死した。子孫が続いたのは三男Friedmundのところだけである。三男ははじめBlankenseeという領地を相続していたが、彼には息

子が長男エルヴィンの下に二人あり、Ottmarがブランケンゼーをもらった。もう一人の息子Annoisの長男つまりこれもアヒムの曾孫で、同じくアヒムを名乗っているが、彼の領地に詩人の父親のものであったノイドルフとフリーデンフェルデの名前が浮上してくる。小作に出してあったとしても、ともかく所有権を保持し続けるのは大変なことである。ラーベス夫人の執念と才覚が脈々と伝わっているのを見る思いがする。なお詩人の兄は結婚せず、相続からは外れている。

ブランケンゼーの領地に関しては一言付け加えることがある。オットマールは農場に機械を導入することに熱心で、言葉巧みなセールスマンに乗せられ、高額な機械を次々と買い込んだ。彼はそれを自分の領地の収入では償還することができず、ついに破産に直面した。その時兄エルヴィンは、自分が相続していたアヒムとベッティーナの文学的遺品の一部を提供し、それを競売にかけて弟を救ったのである。

存命中のアルニムの子孫による報告はそれはそれで大層興味深い。身内なればこそ語れる事実関係は貴重であるが、場合によっては、身内による証言は割り引いて聞かねばならないこともあるかも知れない。クララの回想録からは、本稿のテーマに関係のある幾つかのエピソードだけを紹介しよう。

彼女は都会の上流階級のいわゆる令嬢で、おとりまきも多かったが活発で自立心の強い娘であった。21歳のときアヒムの曾孫フリートムントと知り合い、初めはその「田舎者」ぶりをおかしく思いながらも、彼の断固とした大人の態度に惹かれていく。彼は当時2年前に父親エルヴィンを亡くして、ツェルニコフ、ベーアヴァルデすべての領主であった。しかし彼女は彼の曽祖父母つまりアヒムとベッティーナの詩人夫妻、特に憧れのベッティーナを強く意識している。何度目かのデートで初めてヴィーパースドルフ城へ連れていってもらう。その頃そこに常住している家族はおらず、まさに彼女はその城を最高の案内人つきで見物する。今われわれが城を訪れるのとほとんど同じ好奇心、同じ興奮である。次の段階は彼の家つまりツェルニコフ城への招待である。この時は「未来の姑に会うことになるかも知れない」という緊張があるもののやはり、ここでアヒムが幼少年時代を過ごしたのだという感慨が去来する。食堂の白い壁をかつて幼いアヒムとその兄は、オランダのデルフト焼きの壁

タイルを模して小さい四角に区切り、青色の絵の具で一つ一つに様様なモチーフの絵を描いた。それはエルヴィンがツェルニコフを取り戻した時にはひどく傷み、色も褪せていた。クララが見たものは、絵心のある彼の娘が壁紙にそれを模写して、原画の上に張ったものであった。フリートムントのプロポーズの言葉は「私と一緒に私の森の世話をする気はありませんか」であった。

結婚後義母はツェルニコフの領主夫人の座をクララに明け渡し、三人の義妹たちと共にウィーパースドルフへ居を移した。この二つの領地は150km離れているがフリートムントはその両方の面倒をみていた。クララが慣れないこの暮らしを懸命に守ったのは、もちろん夫婦愛によるものであろうが、彼女には最初から個人レベルを超えて、アヒムとベッティーナのゆかりのものを自分が託された、という文化的使命感があったように思える。初めてヴィーパースドルフ城を訪ねた夜、彼女の胸は「魔法にかけられたお城」の経験でいっぱいである。彼女もまたその魔法に呪縛されてしまったのかも知れない。

さてツェルニコフはエルヴィン、フリートムントの2代にわたって、古き良き家父長制の理念で守られ発展してきた。嫁に来たクララの仕事の一つは、領主夫人として村の教会のパトロン用の特別な席に、日曜ごとに顔を見せること、村で行われるすべての結婚式と葬式に出席することであった。そのような平和な生活が15年間続いた。1945年ドイツの敗色が濃くなり、ソ連軍の侵攻が迫る。フリートムントは家族を西に送り出す。しかしその間にドイツはこの戦争に負け、移動は阻まれ、またもや苦労してツェルニコフにもどるしかない。夫はソ連軍に連れて行かれ、領主屋敷は占拠されていた。ソ連の占領政策は何よりも大資本家、大土地所有者（ユンカー）の追放であった。

クララの幼い子供6人を抱えての戦後の苦難の物語は割愛する。東側からの避難民が道路にもあふれかえっている情況で、屋敷はその収容のために使われ、爆破されることはなかった。1973年になって、西側に落ち着いていたクララが初めてツェルニコフを再訪した時、城館には17所帯もの家族が住みつき、建物も森も農地も荒れ果てていた。今ツェルニコフ城とそれに付属する建造物は、信託公社から開発会社の手に移され、修復保存の方向に向かっている。1998年のコロキウムには、改修された

元の検査官の建物が使われた。フレーダースドルフの先祖代々の墓所は、その修復資金の目処がようやくついたところで、次は教会の保存運動である。かつての美しいロココ様式の領主屋敷は、今は城館の名に値しないままである。

おわりに

領主として詩人として、その調和しにくい二つの責務を誠実に果敢にやり通したアヒムに、ブレンターノ家の奔放な血がベッティーナによって加えられ、彼ら夫妻の子孫は生き方を方向づけられている。平和愛好者、信念をもった領地経営者は続いた。芸術的才能に恵まれた画家は何人か生まれた。しかし傑出した詩人は、少なくともフォン・アルニムの名を継ぐ男系にはいないようである。それだけ一層と言って良いのかどうか判らないが、子孫は城館とともにその中に残された詩人夫妻の文学的遺産を、畏敬の念をもって守った。夫妻周辺の人々からの自筆の手紙、草稿、絵画、ゲーテの書き込みもあるゲストブック、蔵書。そのうちのどれだけがこの激動の時代を生き延びることが出来たのであろうか。戦争による被害については触れたが、特に戦後の窮乏の時代には、それは子孫にとって換金可能の動産でもあった。消失、没収、私蔵、寄付、公共機関への売却、一般の競売等々それらのたどった運命も様様である。今ようやく2回目の配本が出ようとしている全40巻予定の原典批判版で、アヒム・フォン・アルニムの多方面にわたる著作や往復書簡が、一般研究者の手の届くものになろうとしている。その基礎となる資料類はヴィーパースドルフ城の「開城」によって、一気に増加したことは事実であろう。

以上300年近くにわたるアルニム家の領地・館の移り変わりを概観してきたが、単にアルニム一家の財産の流れというだけではなく、ここには大きくはプロイセンの歴史、そしてさらにドイツ現代史の、いわば定点観測的な意味合いも見出されるのではないだろうか。